

腐食する水

小林まもる

懐かしいふるさとの敵陣

成熟はいつも同じ姿だったのか

成熟は既に腐食する水の中で始まっている

枝垂桜の散った泥の堀端には

種のない人々が明るく群れていく

戦いが済んで 無為の時間に満たされ

八十九歳の老婆が逝った日

数年前 さきに逝く夫の枕辺で

新妻鏡を口ずさんだという

その娘のような老婆も逝った日

午後の無時間が頽廃する

成熟は既に腐食する水の中で始まっている

繰り返す夢に傷ついてなんになるのか

家族ずれがにぎやかに

演習見物から帰ってくる泥の堀端

砲撃の音が既に

遠くから鳴り響いていた

